

酒造組合

「サイト漫遊記」

〔西日本編〕

「おらが国自慢、酒自慢」



北原伸一

イラスト／永美ハルオ

2017年の幕開けとなる小誌前号当欄では、「酒」すこくを賑々しくお伝えしたつもりだった。当初、全都道府県制覇を目標に、筆者の鼻息は荒かったのだが、紙幅の都合もあり、北海道から始めた全国行脚は中部地方で挫折、急遽「東日本編」と銘打ち、帳尻を合わせた格好になってしまった。

そこへ追い打ちをかけるように、前号原稿を読んだ我が愚息からは「すこくと謳いながら、(2コマ進む)とか(ふりだしに戻る)とかのイベントがない」という鋭いツッコミが入る始末で、その後、自己嫌悪に陥り、冬ごもり状態にあったのでした。

でも、季節は過ぎ行き、うららかな春になった。いつまでも過去を引きずってはいけません。桜前線の北上に従い、筆者のボルテージも急上昇。何事もなかったようにポジティブ思考に変わる。と、いうわけで、お待ちでしたしました「西日本」の皆様、桜前線に逆行するように、装いを新たに「サイト漫遊記」として近畿地方から南下してまいります。

おいらんが、酒いん、近畿・中国の本州勢

滋賀県は約40の蔵元が加盟、近江酒を醸している。サイトでは蔵元代表者の似顔絵があしらわれ、各蔵が探せる仕組みになっている。蔵元の似顔絵にカーソルを合わせると、バストアップの似顔絵はアップ画像に変わり、さらにクリックすると各蔵元のサイトへ。

だが、そもそもこの似顔絵、いったい誰なのか。蔵元の代表者であることは容易に想像できるが、バストアップの人物とアップしたときの人物が別人という蔵もある。

モヤモヤ感を残しつつ「京都府へ。酒どころ伏見地区を抱えるだけあって酒造組合も京都、伏見、峰山、宮津、福知山、丹波と6地区に分かれ、連合会を組織している。なかでも日本屈指の酒どころ伏見のサイトは、町や酒の歴史も丁寧に解説されていた。

「上方の酒」を醸す「天下の台所」こと大阪府。摂津、河内、和泉と呼ばれた三州で地酒が醸されていた大阪では、天下一の酒どころと謳うわりにはサイトはあつさり。各蔵元のHPへ飛ぶ蔵元紹介と、各蔵の酒を甘辛濃淡でわかるグラフを3種掲載しているのみ。浪花独特のコテコテ感を感じられない。

続いては、日本を代表する灘の酒を擁する兵庫県。9地区の酒造組合からなる連合会が組織されるが、連合会のサイトは各組合への窓口ではない。しかも9地区の酒造組合をチェックしても、ほとんどは蔵の名簿が出てくるだけ。なんとか及第点に達するのは本場、灘五郷酒造組合のサイトくらい。

〈大和のうま酒〉を標榜するのは、日本清酒発祥之地を自任する奈良県。県内桜井市には酒の神、大物主大神が祀られ全国の酒造家の信仰を集めることが説明されている。

世界遺産の熊野三山や高野山のある和歌山県。〈ぐつと飲ろう紀州の清酒〉を醸す蔵は16蔵。サイトでは連合会と各蔵の紹介が

すつきりレイアウトされている。

そのまま中国地方へ。まずは16歳が加盟する鳥取県。鳥取といえば、「酒は純米、燗ならなおよし」の名言で知られる日本酒造技術の第一人者、上原浩先生の出生地として知られる。人気漫画『夏子の酒』に登場する、上田久々のモデルと言われる御仁で、当然、功績を称えるページが充実。

お隣り鳥根県は出雲大社のお膝元ということもあり酒造りが盛ん。組合のロゴにあしらわれているのは宍道湖に沈む夕陽だろうか。蔵元以外に蔵人の紹介ページもある。さらには「酒蔵ではたらく」というページもあるが、そこを覗くと……。(希望の方は直接、蔵元までお問合せください)だって。

『万葉集』に「吉備の酒を詠んだ歌がある

という岡山県。全国の9割を栽培するという酒造好適米「雄町米」は岡山産といわれている。サイトでは吉備の酒が飲める飲食店の紹介もしている。

〈のんでみんさいひろしまの酒〉。灘の男酒に對して女酒を醸すといわれる広島県。そのため女性を意識してか、〈お酒テラビー〉や〈日本酒の健康と美容について〉というページも。日本酒に含まれるアミノ酸や有機酸などの栄養成分は美肌効果あります。

山口県のサイトで目にしたのが、「山口伝説」という取り組みだ。なんでも県内34の蔵元有志が集い、県内産の山田錦を使い造り上げた酒だ。とっておきの時間に飲んで欲しい酒とか。

独自の文化が酒に宿る

四国・九州・沖縄

さて本州から瀬戸内海を渡って四国へ上陸です。まずは徳島県。県内28蔵では特色ある「阿波の酒」を醸している。阿波踊りなど観光資源もありながら、悲しいかな、イベント情報は7年前の「寿司&地酒まつり」以降更新なし。

讃岐といえば香川県。「讃岐に行けば、さぬきの酒を飲み、デザートがわりにうどんを食ってこい」という言葉があるほどに、旬の味覚に合わせ酒も美味い県だ。「さぬきの酒

サポーターズ倶楽部」では会員募集中。

「伊予の道後酒」として隠れた酒どころといわれる愛媛県。県内46蔵がその伝統を守り続け、地中海料理と合う日本酒をコンセプトに、県内統一ブランド「har(マール)」を発売した。〈酒国・土佐〉の高知県ではサイトを開くと5月末に大阪で開催されるイベント「四国×酒国」の案内がドーンと目に飛び込んでくる。さすが、土佐のいごそう、酒豪県だ。ちなみに使う飲酒代では毎年全国各地で上位にランク。

そしてついに九州の地へ。まずは福岡県。このサイトはなかなか凝っている。「感性」を表す言葉から、ご当地の1本を薦めるといって遊び心溢れる仕掛けだ。例えば、「晴朗」の言葉を選ぶと「菊美人 特別純米酒」・「吟山田」などが、「雄渾」の言葉では「若竹屋大吟醸」とか、「風趣」の言葉からは……、あれつ、これは該当なしか。

〈さかん酒〉佐賀県では、「佐賀県原産地呼称管理制度認定酒」(通称・The SAGA認定酒)制度を整えている。①佐賀産原料100%、②佐賀県内の蔵元で製造、③味や香りの審査に合格、そんな厳しい基準で純米酒と本格焼酎を選定しているという。

県内25蔵が加盟する長崎県でも地元元の原料に拘る。15年12月に「長崎県産酒による乾杯条例」を制定している。1年経った昨年暮れ、「長崎県産で乾杯！推進大会」を開催し、その模様が公式ブログに掲載されていた。被災地となった熊本県。県内すべての蔵が何らかしらの被害を受けた。復興状況を知

りたくブログを開いた。

〈熊本酒造組合では、「がんばるけん熊本!!」のメッセージが入った首掛けを、各社の製品に添付し出荷することにいたしました。「がんばるけん」は熊本弁で「がんばるから」の意味ですが、「がんばる県」と、「私たちみんなで」がんばるから(一緒にがんばりましょう)!!という意志や決意の意味も込められています。応援してあげ！

江戸時代から「麻地酒」という伝統の銘酒が伝わる大分県。大分ではむしろ麦焼酎のほうが有名だが、ルーツはこの麻地酒だ。詳しくは同県酒造組合のサイトを。

酒をこよなく愛した歌人・若山牧水を輩出した宮崎県。〈南の酒だより〉と銘打つサイトを覗くと、加盟する蔵のほとんどは本格焼酎蔵であることがわかる。

お隣り鹿児島県も言わずと知れた焼酎王国。〈ポルドー、コニヤック、スコッチなどと同じく、WTO世界貿易機関の協定に基づく産地指定を受けました。〉と高らかに《薩摩焼酎宣言》をしている。

西日本の組合巡りを締めくくるのは沖縄県。やはり組合サイトの表題には《泡盛百科》とされ、泡盛911点を網羅しているという。ぜひこの中から、自分だけの「アジクーター(味のしつかりした個性的)な1本を選んでほしい。

2回に分けてお送りした酒造組合漫遊記。駆け足で紹介したが、サイトを覗いただけでほろ酔い気分、なんともご機嫌だ。

